

2020.5 No. 45



佐賀大学病院ニュース

患者・医療人に選ばれる病院を目指して News & View

〒849-8501 佐賀市鍋島五丁目1番1号

TEL 0952-31-6511(代)

病院ホームページ <http://www.hospital.med.saga-u.ac.jp/>

新型コロナウイルス感染症の現状と対策

佐賀県での感染疫学

人口およそ83万人の佐賀県における感染者数は、2020年5月20日現在、45名であり、単純に計算すれば、1万人に1人という低い罹患率であることが解ります。クラスター(集団発生)も2件ほどありましたが、感染した方、およびその接触者から周囲に感染が波及する事態には至りませんでした(図)。

インフルエンザのような流行り方はしません

新型コロナウイルス感染症(本感染症)は、罹患者の死亡率(3~4%)はインフルエンザ(0.1%)よりも高く、注意を要すべき感染症です。しかし、このウイルスは市中の様々な環境に生息するのではなく、感染者の体内か、その飛沫が付着した環境表面にしかいません。また、総感染者数はインフルエンザには遥かに及ばず、ヒトに十分に馴染んだ感染症にはなっていないことを意味します。従って、流行期に、流行地域においては3密を避けるなど、感染防止策に留意すれば、罹患リスクは決して高くありません。インフルエンザは、多くの人が感染するのに対し、本感染症は、殆どの人が感染しないのです。

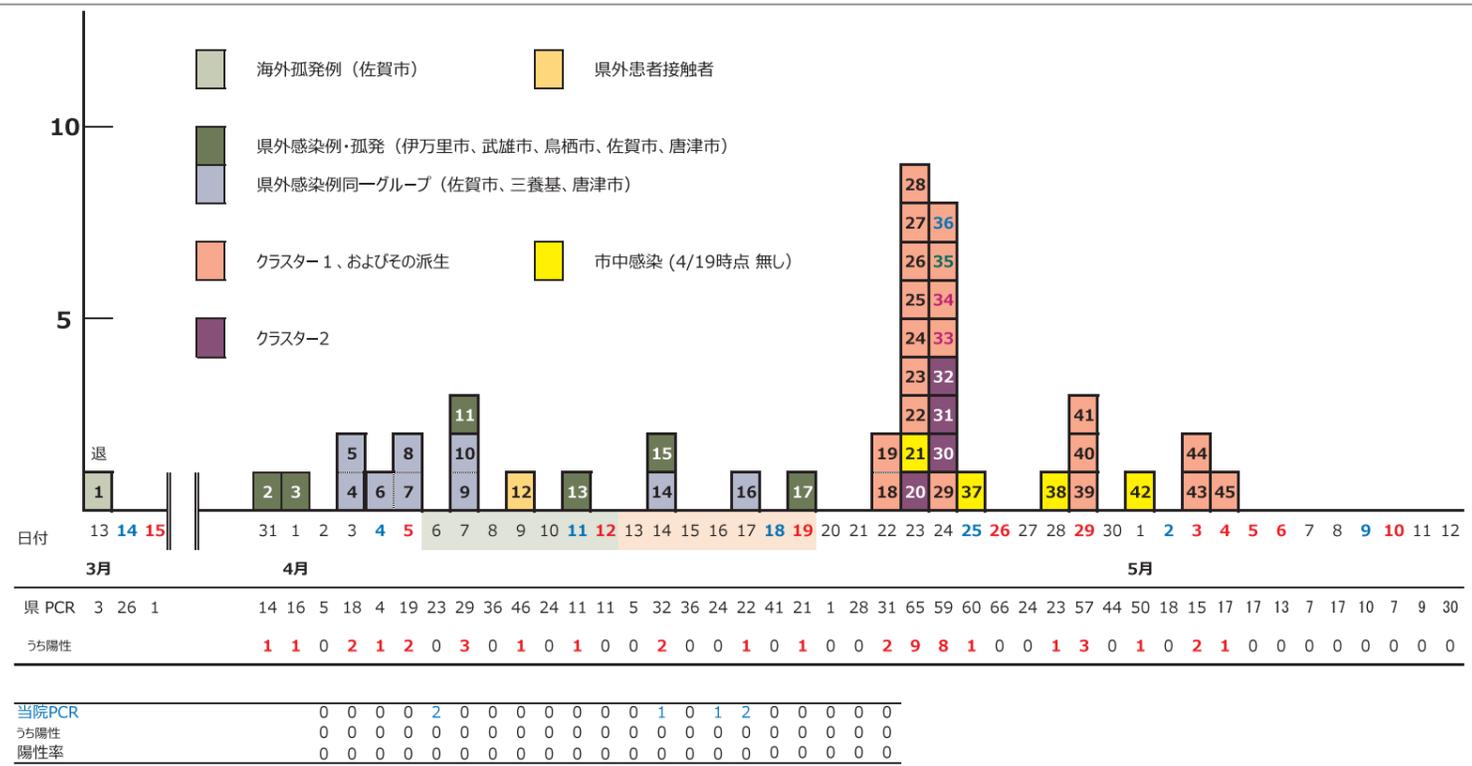
基本的予防策の習得を

咳を有する場合、あるいは流行期に人混みに出る場合はマスクを着用し、社会的環境に触れた後や帰宅時には30秒~1分程度をかけて手洗いをす。日頃からこの習慣(標準予防策)を身に付けておくことが最も重要です。新型コロナウイルスによる感染症はこれまで2002年(SARS)、2015年(MERS)に発生しており、今回は3回目の発生になります。今後、いつなのかは不明ですが、4回目の流行がヒト社会を悩ませる可能性があります。しかし、本感染症が再び流行しても、特別な感染防御策ではなく、日頃の標準予防策を遵守すれば、感染のリスクを低減させることが十分に可能であることをご理解下さい。



感染制御部

部長 青木 洋介



慢性骨髄性白血病の治療薬 スプリセルの中止に関する研究

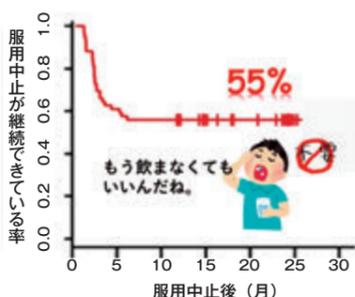


内科学講座 血液・呼吸器・腫瘍内科

教授 木村 晋也

慢性骨髄性白血病(CML)は骨髄移植が成功しない限り、全ての患者さんが数年以内に死ぬ難病でした。2001年にグリベックが発売され、ほぼ死なない病気となりましたが、生涯内服を続ける必要があると考えられていました。フランスのグループが、グリベックを6年ほど飲んで、そのうち原因遺伝子が2年以上検出されない患者さんでは40%で内服を中止できると報告しました。2009年には、より有効性の高いスプリセルが発売されました。そこで木村晋也らは、スプリセルなら、より短期間で、より多くの患者さんで中止できるのではないかと考え、診断時からダサチニブ(製品名:スプリセル)を服用し、最低1年間以上原因遺伝子が検出されなくなった患者さんで、ダサチニブを中止する臨床試験(First DAD)を全国23の病院と共同で行

いました。その結果、わずか3年程度の服用で55%の患者さんが安全にダサチニブを中止できることがわかりました。この結果は、患者さんを高額な医療費、長期服用による副作用から解放するだけでなく、国民医療費の削減にも役立つと期待されます。本研究は、診断最初から服用した場合の世界的初のスプリセル中止試験であり、「ラセット血液学」という一流紙に掲載されました。



メディカルサポートセンターが 移転しました

看護師長(病床管理)

持永 周子

2月1日にメディカルサポートセンターが中央診療棟より外来棟へ移転しました。メディカルサポートセンターでは入院を予定している患者さんが安心して入院・治療を受けられるよう、入院中に行われる治療や入院生活の説明、服薬中の薬の確認など入院に向けての支援を入院前の外来受診時に実施しています。介入件数は入院前支援と入院当日とあわせて月平均600件で年々増加傾向にあります。移転先は病院ロビーの隣で、患者さんの動線やスタッフ間の業務連携の取りやすい場所となっています。また、新しい執務室は地域医療連携室と共用となっており、メディカルサポートセンター、地域医療連携室、退院支援専任看護師がこれまでは電話で連絡を取り合っていたこと

も対面で話すことができるようになり、早期の情報共有や介入につながっています。さらに、新しい取り組みとして、3月より(まだ泌尿器科のみですが)、予約制の導入と麻酔科の周術期外来を開始いたしました。これからも患者さん、地域の皆様のお役に立てるようスタッフ一同努力していきたいと思っております。よろしくお願いいたします。



▲メディカルサポートセンター受付

キープ・ママ・スマイリング からの缶詰提供



子どもセンター(2階東病棟)
師長 佐保 直子

佐賀大学医学部附属病院子どもセンターには、子どもの入院に付き添うお母さんを応援する活動「キープ・ママ・スマイリング」というボランティアの方により缶詰を提供して頂いています。

子どもセンターでは、入院する子どもの付き添いは、お母さんが殆どです。入院中は母親の負担が大きくかかりがちです。特に小さなお子さんは、お母さんの姿が見えないと泣いてしまいます。「トイレにも行けない」など話されたりする方もいらっしゃいます。中には、泣くことで病気に悪影響がある方もいます。平日の日は、検査や手術があり、いつ呼ばれるかわかりません。付き添いのお母さんは、ベッドサイドを離れることがなかなかできず、食事がとれなかったなど、聞くことがあります。冷凍食品やカップラーメンで済みます方も多く、毎食、コンビニ中心の方々もいらっしゃいます。缶詰はお母さんの栄養面を考えて作られており、



▲缶詰のメニュー



▲ボランティアスタッフによりラッピングされた缶詰と人形

缶詰を頂いたお母さんは、「パンと一緒に食べました」「サラダにかけると、レストランで食べているような感じでした。」など様々な声が聞かれています。毎月、ボランティアの方より、缶詰を4缶と手作りのお人形を一緒に渡されますので、お母さんだけではなく子供たちも楽しみに、待っています。

令和元年度 病院長賞

附属病院医療安全管理室 副室長 木村早希子

術前中止薬管理用WEBアプリ 開発チーム

附属病院横断的止血・血栓診療班と医療安全管理室が共同で「術前中止薬管理アプリ」を開発、木村副室長はこの開発の中心メンバーとして貢献した。本アプリにより科学的根拠に基づき適切な休薬指示が可能となると考えられ、全国の病院から使用許諾の依頼が来ている。



▲病院長賞授与式

令和元年度 文化コーナー

俳句(社)日本伝統俳句協会会員「玉藻」同人 木下方沙羅 (選)

- にこにここと 頷く医師の 涼しき目
- 煮大根 大事なことを さりげなく
- 消灯を 告げゆくナース 夜は長き
- また歩く まだ歩きたい 桜かな
- 柳(佐賀大学医学部附属病院広報委員会 選)
- 古い待てよ 妻の歩きに 追いつかず
- 良くなれと 医者と患者で ワンチーム
- 胃カメラで そつと背に添え 看護の手
- 若いねと 言われて伸びる 母の腰
- 病院の ロビーで会える お友達

応募総数は年々増え、今回は川柳200、俳句は140作品を応募いただきました。全国からたくさんのご応募をいただき、誠にありがとうございました。優秀作品に選ばれた方々の作品を紹介します。また、病院ホームページや外来口ビーに全作品を掲示しておりますので、ぜひご覧ください。

院内学級の児童生徒による作品

おくすり
モビコールのむと頭がいたくなる
あじはしよっぱい
にがくないけどしよっぱい
のむヨーグルトといっしょにのんだ
しよっぱいのが少しなくなる

一口一口ゆっくりのんだ
おうえんしてくれたいろんな人
がんばれ あと少し
40分くらいかかった
ぜんぶのめたからうれしかった
だんだん慣れてすぐのめるようになった

診療科紹介

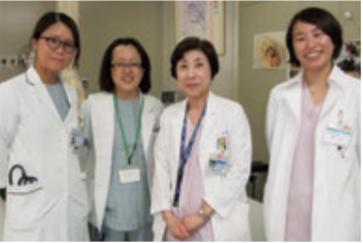
ペインクリニック・緩和ケア科



診療教授 平川奈緒美

ペインクリニック・緩和ケア科は、痛みという病態全般の診療を行う診療科です。外来は、非がん性疼痛患者を診療するペインクリニック外来とがん性疼痛患者を診療する緩和ケア外来を行っています。院内の緩和ケアセンターおよび緩和ケアチームとして痛みや他の身体症状の緩和の役割も果たしていますし、がん性疼痛の治療としては、薬物療法のみならず、神経ブロックを活用して治療を行っています。早期に行うことで、患者さんにより質の高い生活を送っていただくことが可能になります。

ど多岐にわたります。ブロックは、従来法に加え、超音波、X線、CTを活用しています。脊髄刺激装置植え込み術などの侵襲度の高い治療も行っています。痛み以外の手掌多汗症に対する手術や顔面痙攣などに対するボトックス治療も行っています。県内外から難しい痛みの患者さんが当科へ紹介されてきます。困難な症例に関しては、痛みセンターとして神経科や整形外科、神経内科、口腔外科とカンファレンスを行い、協力して治療にあたっています。今後も九州大学および県内の医療機関との連携を図りながら痛み治療に努めていく所存です。



▲ペインクリニック・緩和ケア科スタッフ

就任挨拶



内科学講座(消化器内科) 教授 江崎 幹宏

令和2年4月1日付けで佐賀大学医学部内科学講座消化器内科の教授を拝命しました。2年前に九州大学から内視鏡検査部門を診療の中心とする本院光学医療診療部に赴任し、私の専門領域である消化器内科診療に従事しておりましたが、この度本学部の消化器内科を牽引していく立場を与えていただきました。

我々の消化器内科では食道から大腸までの消化器疾患全般を取り扱ってきました。この路線はこれからも変わりませんが、時代とともに中心となる消化器疾患は変遷しています。消化管がんでは、ヘリコバクターピロリ菌感染率の低下とともに胃がんが減少する一方、大腸がんは増加し、わが国のがん罹患率の第一位となっています。また、食生活の欧米化とともに潰瘍性大腸炎やクローン病といった炎症性腸疾患患者数は急速に増加しています。さらには、小腸内視鏡機器の開発・普及に伴い小腸疾患を診療する機会も増えていきます。これらの疾患の診断・治療はその特殊性から大学病院の果たす役割は大きいと考えます。一方、超高齢化社会にあるわが国において、地方の大学病院は消化管出血や胆道結石などの救急疾患にも速やかに対応できる機敏さも持ち合わせる必要があると思われま。

私は、関連各科ならびに佐賀医療圏の医療施設と密に連携を取りながら、大学病院として要求される高い専門性と救急疾患にも適切に対応できる柔軟性を兼ね備えた消化器内科へと発展させていきたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

連携病院紹介

佐賀県医療センター好生館

【病院の紹介】

好生館は地域の健康を支える中核病院のひとつとして、救急医療、脳・循環器医療、がん診療、小児周産期医療などを中心に、35診療科、多職種のチーム医療で総合的に診療する急性期病院です。地域の医療機関、介護関連施設の皆様との気持ちの見える関係をめざし、日々連携強化に努めつつ診療を行っています。長年患者さんにもご迷惑をおかけしてしまいました駐車場不足も昨年12月に解消いたしました。また、国より指定された基幹災害拠点病院や感染症指定医療機関でもあるため、常に有事に備え体制を整えておりますが、3月現在、新型コロナウイルス感染症対応の真っ最中であり、1日も早い終息を願うばかりです。

【佐賀大学医学部附属病院との連携の状況】

当館に在籍する医師の半数以上が佐賀大学出身であることもあり、患者さんの紹介はもとより、診療応援や研修会、研究会などの活動でも強力に連携いただいております。診療科によっては疾患による治療の棲み分けを行い、患者さんにとっても効率的な診療を提供しています。また佐賀大学の関連教育病院として、医学部や看護学生の教育指導の一翼も担っており、今後さらなる連携強化で地域医療に貢献してまいりたいと思っております。



館長 佐藤 清治